

琉球・沖縄におけるアイデンティティの光と影

著者	カーロリ ローザ
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	4
ページ	57-76
発行年	2007-03-31
URL	http://doi.org/10.15002/00022588

琉球・沖縄における アイデンティティの光と影

ローザ・カーロリ

1) アイデンティティの時間

私は1980年代に旧ユーゴスラヴィアで何度も夏休みを過ごした。海は大変美しく、生活費は安く、人々は本当に親切だった。すでに経済危機が様々な共和国の間に敵対関係を生じつつあり、ティトウス（1980）の死とともに政治的仲裁が可能であったカリスマ的人物はいなくなったにもかかわらず、1990年代の初めに生ずるであろう国々と民族間の隠れた闘争は何も感じられなかった。したがって、テレビで見たに過ぎないが、私が知っている場所や人々を巻き込むばかりでなく、ヨーロッパが決して二度と繰り返さないと自らに誓った経験をふたたび繰り返しているように思われ、その戦争を見て強いショックを受けたのである。大量虐殺は私にとって過去の悲劇的经验であり、これほど近くで見ようとは夢々思わなかった。

しかし、この戦争に何か他のもの、予想できなかったばかりでなく、それ以前には想像することさえできなかったものが見出された。事実、自分の同国民に武器を向けることは、正にイタリア史においてファシズムに対するレジスタンスの経験として起こったため、考えられないことではない。しかし、別の民族に属する親族の間で殺し合うという事実は、私にとっては全く考えられないことであった。これは正に集团的狂気のように思われ、例えば、個人が自分の兄弟の結婚相手を殺さざるを得なくなるというのはどういうことなのであろうか。つまり、一体何が、個人をして民族的所属を優先させ、家族の絆を切る（その上、これほど暴力的なのは私にとっては「不自然」ですらある）までに至らせるのであろうか。これらはすべて、個人をして他の形の連帯をすべて無

視し、ある決まった集団への連帯を優先するよう強いる力が存在することを意味する。このことは、あるグループとの一体感が変わると、同じ一体感が時とともに変わらないわけではない、ということも意味する。

すでに述べたように、これらの事件は集団的狂気のように思われる。これは時間的に限られた視野で見たためであろう。しかし、現実には異なった民族の間に激しい闘争を引き起こした事実をより良く理解するためには、この集団的な共存の分裂をいっそう広い歴史的視野の中で考慮する必要がある。

したがって、近代国家の根源、国家主義のイデオロギー、民族の概念、共同体のアイデンティティなどについて私を真剣に反省させたのは、これらの悲劇的で極端な事件であった。この同じ年に、世界の多くの地域で同じような反省が起こっている。事実、私は正にこの時期に熱に浮かされたような方法で、国家、国家主義、共同体のアイデンティティについて語っている文献に色々な鍵を見出した¹。これらの文献は、基本的に冷戦終結後何十年もの間、イデオロギーの内部で凍結してしまっただけの闘争が和らぎ始めたとき、両極性の危機によって開かれた問題に与えようと求めてきた答えの成果である。冷戦の終結によって開かれた問題以外に、例えば世界の一方から他方への大量の移民、グローバリゼーション、ヨーロッパ統合の創設からイスラム世界の極端な派に由来するテロリズムまで、近代国家及び共同体のアイデンティティが繰り返し挑戦し続けてきた。

要するに、共同体のアイデンティティは外部からの刺激に相互影響されるように思われ、時には驚くべき速さで変化しようとする。例えば、旧ユーゴスラヴィアの場合ばかりでなく、多くの国々が国際的なテロリズムの脅威を前にし

1 このテーマに関する現存する豊富な文献のうち、代表的なものとして以下の名を挙げれば十分であろう。Eric J. HOBBSBAWM, *Nations and Nationalism since 1780*, Cambridge University Press, Cambridge 1990; Eric J. HOBBSBAWM - Terence RANGER (eds), *The Invention of Tradition*, Cambridge University Press, Cambridge 1983; Benedict ANDERSON, *Imagined Communities: Reflection on the Origins and Spread of Nationalism*, Verso, London-New York 1991; James G. KELLAS, *The Politics of Nationalism and Ethnicity*, Macmillan, London 1991; Ernest GELLNER, *Nations and nationalism*, Blackwell, Oxford - Cambridge 1983; Miroslav HROCH, *Social preconditions of national revival in Europe: a comparative analysis of the social composition of patriotic groups among the smaller European nations*, Cambridge University Press, Cambridge 1985.

て内部で反応した有様である。これは、少なくとも我々が直接に感じ取るものである。

アメリカ合州国の例を取り上げよう。多くの人々が、9月11日の事件が数ヶ月前に行われた大統領選挙の不確かな結果によってもたらされた激しい対立を乗り越えたことを何回も強調した。しかし、その政治的対立は、いかに激しかろうとも、「アメリカ国民」というものの統一性を実際にいかに破壊したであろうか。もっと一般的に言うと、共同体のアイデンティティの内部でどれぐらいのものが変化し、どれぐらいのものが不変であるかということである。答えは多様でありうと思う。それはまず、この問題を考察しようとする視野によるものだと思う。

この件に関しては、ブローデルの「歴史時間」に関する有名で鋭い直感を思い出す。事実、「歴史時間」は単なる年の継続ではなく、「記録の日々の時間や伝統的な歴史の時間に関係のない千の速さ、千の緩慢さ」の時間である²。周知の如く、ブローデルにとって集団の歴史現象の真の性質に最も良く焦点を当てるものは「長い持続 (longe durée)」の時間である。しかし、短い時間に関してはブローデルは「持続の最も気まぐれで、最も欺瞞に満ちた」時間であると言っている。上記の観点によれば、「アメリカ国民のアイデンティティ」が大統領選挙によってもたらされた政治的分裂によっていかに危険にさらされたか、またツインタワー襲撃以来アメリカ「国民」はいかに内部の統一性を再発見したかという問題について論ずるのは無意味であると思う。

琉球・沖縄のアイデンティティのテーマに合わせて、沖縄のアイデンティティを考察するためにどの「時間」を優先すべきであろうか。あるいは琉球のアイデンティティと言う方が良いのであろうか。または琉球・沖縄のアイデンティティであろうか。事実、沖縄のアイデンティティについて論ずるのは、それ自体時間のコンテクストの選択を含んでいるように思われる。つまり、琉球王国が日本の沖縄県になったのち、1870年代に続く歴史のことである。しかし、周知の如く、1879年以後の沖縄の歴史は一貫性があり、直線的であるとは全く言えない。実際、大正時代、戦時下、アメリカ占領時代、軍国化、あるいは

2 Fernand BRAUDEL, *Écrits sur l'histoire*, Flammarion, Paris 1969 (イタリア版 *Scritti sulla storia*, Mondadori, Milano 1973, 41頁)。

1972年の日本への返還の時代の沖縄について論ずるのは、政治的、経済的、社会的面の下で互いに非常に異なるというコンテクストに触れることである。そして、これらの衝撃的な事件が何らかの形で「沖縄のアイデンティティ」と相互に影響を与え合ったということを想像すると、このアイデンティティは一貫性がなく、直線的ではない過程を辿ったと考えることができる。

「琉球のアイデンティティ」という概念の使用も曖昧である。どんな時のコンテクストを選択しようとしているか明確ではないからである。尚王朝から八重山の農民まで、琉球王国全市民によって共有された「琉球意識」があったとしても、我々は1879年以前の歴史に限って触れるのか。それとも、1879年以前の伝統から生き延びたものに触れることにするのであろうか。

「琉球」及び「沖縄」という言葉が持っている様々な意味は、実際、この地域のアイデンティティがいかに真に複雑で多面的な問題を露呈しているかの第一の徴候になると思う。それは、疑いもなく、この列島の集団的な変遷が歴史の最後の1世紀半に経験した複雑で多面的な過程に結び付けられる。非常に短い歴史的時間の中で実証された挑戦、分裂、衝撃の多い変遷である。それでは、琉球・沖縄の集団的な変遷をその内部に含む「長い持続」時間を確定することは可能であろうか。

2) アイデンティティの形成

15年前に書いた博士論文は「近代及び現代日本の少数民族。沖縄の場合」という題であった。起源より今日までの歴史的過程をすべて回想したとは言え、論文の主要点は、「琉球処分」の分析であった。私見では、琉球・沖縄の歴史における決定的な分水嶺であり、日本の少数民族として、沖縄の歴史の始まりであった。続いて、私は「沖縄の場合」を特に明治近代国家の成立過程に関して研究し続けた。そして、日本近代国家の形成と発展の過程を見ることによって「周辺」の視角としての沖縄を取り上げ続けた。この観点によって琉球・沖縄の歴史は、日本の近代化及び産業化によって生み出された「別の」歴史の一つとして現れた。これは、異文化、不均衡な経済発展、社会差別についての歴史であり、したがって、中央で語られた歴史とは非常に異なるものである。す

なわち、この視角によると沖縄の歴史は近現代日本の少数民族の歴史を見ることに限られる。

しかし、沖縄とは単に日本の少数民族であろうか。実際、良く考えると、中央から辺境に投影された画一主義的な見方も、沖縄自体のいくつかの自己表現の仕方も、一貫した集団的な変遷に一致しない。なんとなく、緻密で統一のとれた沖縄というアイディアは、まず中央から辺境へ、と同時に辺境から中央へという一種の鏡の悪戯のように互いに映し合うイメージに由来する。純粹で単純な日本の少数民族としての沖縄のイメージから遠ざかれば遠ざかるほど、沖縄の集団変遷とアイデンティティはますます複雑に、不連続に、多様になるように思われる。

それでは、この鏡の悪戯の目的は何であろうか。そして、日本が歴史的に沖縄について持ってきた見方、特に沖縄がしばしば求めてきた自己表現はどれほど人工的なものでしょうか。そして、沖縄のアイデンティティのこの二重の見方はどこまで想像の産物なのでしょうか。

事実、共同体のアイデンティティは絶えず活動中であり、絶えざる挑戦の対象である。「共同体」というのは、一般に社会的、言語的、道徳的な関係を持つ個人が結び付けられた総体と解釈される。すなわち、「共同体」とは、社会的及び経済的関係という観点から考察された複数の人々として理解される「集団」以上のものである。換言すれば、「共同体」は「集団」に欠けている「個人的」次元をも持っているようであり、「集団」は、まず「公」の結びつきと協定に基づいているように思われる。

集団のアイデンティティは明らかで当り前の存在を持つ「自然な」ものではなく、言語、文化、倫理・宗教組織、政治制度、経済社会の組織と関係、生産手段、身体的特徴、地理上の位置、気候条件などに関わる様々な要因の一致によって生み出された不安定な概念である。これらすべての要因は共有のアイデンティティを作り出し、集団の内部で相互の連帯感を確立するという明らかな役割を果たす。この結果、集団は正に「共同体」になる。

しかし、これらの要因は、必ずしもアイデンティティを定義するために共働するとは限らず、その効果は時が経っても常に不変であるとは限らない。一般的に言えば、集団内の連体の度合いとそれが共同体になり、それを続ける可能

性は、これらの要因がいかに相互影響するかによっている。事実、ある集団を特徴付けるために採用する要因が多くなればなるほど、この集団はますます凝集し、堅固なものとなるのは明らかである。同様に、集団の定義についての批評基準が一致する傾向を持てば持つほど、その内部の連帯感を刺激するためにその効果は、ますます強まる。

その上、上記の批評基準は、ある個人の総体に外部の世界から認識できる様子、つまり排他性を与える。例えば、国家神道は、新しい国家の総体と日本人の一体化を容易にするのに極めて効果的であった。心に働きかけ、近代国家への政治的（公の）所属感の代わりとなるばかりでなく、特にその範囲が、その領域を越えずに、全日本人を抱擁したからである。このような方法で、国家神道は連帯感と共有のアイデンティティを強化することができ、日本人であるという排他性の感じを与えた。日本の単一民族神話というのはこの概念からも作り出されたと思う。

思うに、このような例はアイデンティティの概念の内部に表面的には矛盾している二つの概念があることを示している。すなわち、共有・統一に対する区別・分離である。特徴の共有及び外部からの区別は、ある集団のアイデンティティにおける構成のため積極的に互いに影響し合う。換言すれば、統一されればされるほど、ますます分離され、また逆も起こる。

3) アイデンティティの多面性

一般的に言って、上記の例はアイデンティティがそれを構成しようとし、同時に内部から観取され、外部から認識される造成の産物であることを示している。典型的な例を考慮し、つまり近代国家における共同体のアイデンティティの形成を考慮すると、その作用が意図している多様な目的は容易に定義される。この場合、共有財産を分けていると感ずる（あるいは感じさせられる）集団は国家の国民（あるいは少なくとも最大多数の社会）と一致する。

内部の段階において国家のアイデンティティの形成は、結合の感じを刺激することを可能にする。これは、納税者、徴兵者、労働者あるいは選挙権のある者になった市民のあるいは臣民の側からの国家の変遷への参加、支持及び承認

を得る目的にとって極めて有益になる。その上これらすべては、特に産業化の過程が進んだところでは、経済的・社会的闘争の危険を緩和する。

外部から見ると、国家の構成は政治上、法律上あるいは地域的総体として認識し得るものによるばかりでなく、内部の統一の度合い、つまり「国民」の連帯と結合の度合いにもよる。この意味で、国家のアイデンティティは、国家が国際的に競争（政治的、経済的、軍事的な面で）できることを可能にする堅固な基本構造を表す。近代国家の場合、「国民」のアイデンティティは国家の「外部」への様相を表し、したがって国際的な分野においても重要性を占めることになる。

近代国家の例は、おそらく「アイデンティティの形成」の最も典型的な例であろう。そこでは、このような過程は他で起こるよりも、もっと「自然」に表れる傾向がある。アイデンティティの形成がこの型に従わない場合、つまり「理想的な」共同体の境界が政治的総体のそれと一致しないとき、アイデンティティの問題はいつそう複雑になるように思われる。例えば、ある共同体の境界が国家のそれを「越境」する場合（イスラム世界の場合のように）、あるいは国家内部の民族的、社会的、宗教的、あるいは政治的少数民族の場合のように境界が「狭まる」場合を考えてみよう。これらの例において、共同体のアイデンティティの「外部への様相」がどのようなものであるかを確立するのは、さらに難しいように思われる。

1879年以降の「沖縄の場合」は、国家の境界に比べ「共同体」の境界が「狭められた」例に入ると思う。この場合、アイデンティティの問題は、一般に国家のコンテキストの内部での重要性に限られる。しかし、「沖縄のアイデンティティ」が単に日本内部の「少数民族」であるとは思われないので、沖縄はいつそうの特異性を示している。換言すれば、沖縄のアイデンティティの「外部への様相」が、どのようなものであるかを確定するのは困難であるように思われる。

最近、様々な論文を含む “*Japan and Okinawa. Structure and subjectivity*” (『日本と沖縄・構造と主体』) というタイトルの本が出版された³。この本は琉

3 Glenn D. HOOK and Richard SIDDLE (eds), *Japan and Okinawa. Structure and subjectivity*, RoutledgeCurzon, London and New York 2003.

球処分以降の歴史に触れ、沖縄の「主体」を考慮している。すなわち、日本及び日本の政治的、経済的な戦略上の優位性との関係における沖縄史を考慮している。この本は二つの部分に分かれている。初めの部分では「構造」、つまり沖縄の政治的、経済的、社会的条件（特に、基地、公共工事、観光という三つのK）がグローバルかつ地域的で国家的な秩序の中での沖縄の役割と関係付けて語られている。後半では、分析の視野は、沖縄人が「構造」との相互影響の中で自らをどのように認識しているかを理解しようとして、沖縄の内部に移っている。この観点から沖縄の「主体」及び「アイデンティティ」が、国家の経済政治から合衆国の戦略上の優先に至るまで、日本の内部及び外部によって課された変遷に答えるよう、絶えず要請されていることが明らかにされている。

この観点は、外部に由来する多くの繰り返しの挑戦を前にして、沖縄のアイデンティティがいかに不変の「外部への様相」を示したかを示唆しているように思われる。「沖縄問題」は日本国内に閉ざされたままになっている限り、「沖縄のアイデンティティ」の定義あるいは再定義は主に本土で行われていた。例えば、それは同化の政治によって相互影響を受け、日本化が描写させた魅惑的な視野を前にした従順さと、同化から自らを守ろうとする粘り強さとの間で平行を保ち、過去の豊かで上品な伝統に逃げ込もうとする。正に政治的な「同化」によって表現される、この曖昧な外部からの刺激という形を取る沖縄のアイデンティティに及ぼされる効果については後述する。取りあえず、問題の「外部的」次元にとどまろう。

米軍占拠によって、「沖縄の主体」は新しい「構造」によって相互影響を受けさせられた。これは、「沖縄問題」の空間的な次元を急激に変え、そのアイデンティティの「外部への様相」に著しい影響を与えた。このような意味での明らかな例は、地域の強力な軍事化、農地の強制的接収、新型の経済依存の確立、地域が1972年まで維持した異常な政治状態、このような異常性に由来する住民の政治的及び市民的権利と義務の曖昧な再認識、さらに、分離を正当化し、列島に対する統制を保障することを目的にし、沖縄人が日本の少数民族であるとするアメリカの見方に対する復帰協（沖縄県祖国復帰協議会）の経験にあると思う。「構造」に介入した、このような深くて劇的な変化を前にして、沖縄

のアイデンティティは自分の「外部への様相」を変える傾向を表したように見える。例えば、沖縄人からより広い支持を得るために、復帰協は国家主義の色彩と感情的な性質を取り、沖縄の日本所属を強調する目的で自分たちのシンボルとして日の丸を取り入れるのを躊躇わなかった⁴。沖縄のアイデンティティに向けての「日本の顔」は、復帰協が目標とした政治的目的を射るのにより適したものであると思われる。逆に、沖縄は日本の「少数民族の顔」を示しながら再統一への可能性に妥協する危険を持っていた。

すなわち、集団は外部から身を守るために自らのアイデンティティを変え、協定の可能性をさらに広げるために、その相貌を様々に変化させるかのようである。少数民族という顔は、国家的規模のコンテクストに限って、自らの目的を達成するために最も都合の良いものと思われる。沖縄が日本及び合衆国と、いまだに保ち続けている複雑な関係は「沖縄の主体」を考察するための様々な視点を与えてくれ、「沖縄のアイデンティティ」の様相をより明らかにするのに有効である。沖縄のアイデンティティの外部に向けた様相が、内部における顔と、どの程度一致する傾向を持っているのかを検討すべきだと思われる。この問題は沖縄人が彼らの共通財産に対して、どれだけの共有意識を持っているかに関わってくる。しかし、アイデンティティ意識の問題を検討する前に、まず、アイデンティティの観念がどのようにして共有財産になるかという過程を辿ってみよう。

4) アイデンティティのイデオロギー

実際のところ、絶えざる形成、再定義、操作によって生ずるアイデンティティの概念と実際に一個人が特定の共同体内の経験において行う自己同一化との間にはズレがある。他方、共同体内のアイデンティティの発展は、自然発生的なものではなく、一定集団のすべての成員を同時に巻き込む現象でもない。むしろ、共同体のアイデンティティの形成過程は、上から下へというピラミッ

4 新崎盛暉「沖縄問題をめぐる原点」、『潮』、83号（1967年5月）、218-227頁（英訳“Okinawa Reversion and the Security of Japan”, in *The Japan Interpreter*, vol. VI, n. 3, Autumn 1970, 281-293頁）。

ド型の経過を辿ると言えるのではないであろうか。

いくつかの具体的事項（地域や言語の共有から政治的機構や経済・社会的組織など）をきっかけにして共同体の観念が成立するのは頂点においてである。この共同体の観念は、このような具体的事項を共有観念に変換させようとするのである。したがって、肝心なのは一定の個人の集まりが、同じ日常経験を共にするというのではなく、むしろ彼らがそういった現実を意識しているということなのである。換言すれば、共同体の存在は、個々の存在が共有経験に対して何らの関心も払わない場合には意味を持たないのである。しかし、共同体の観念は人為によって成立する。というのは、共同的自己同一化の基準を選択し、その基準内に序列を付けることによって現実の共有経験に全面的には対応しない共同体の理想的ヴィジョンが形成されるわけである。大抵の場合、人工的操作と各個人が共同的営為をどのように受け止めるかの間のズレは大変大きい故に、それに見合うだけの規模を持った理想的、象徴的世界が要請されるのである。この世界は、儀式、モニュメント、政治的キャンペーン、宗教的行事など、ホブズボウムをはじめとする多くの研究者たちが「創られた伝統」と呼ぶものに満ちており、それこそが「アイデンティティのイデオロギー」と定義すべきものと思われる。

この過程はピラミッドの頂点に位置する、ごく限られた政治階層、知識階級に端を発し、次第に下部に浸透し、理想的共同体のすべてのメンバーを飲み込もうとする⁵。このメンバーたちは、こうして彼らの経験を共通経験と見做し、それを特徴付ける財産と認識するに至るのである。この観点からすると、共同体のアイデンティティは上部からのイデオロギー的形成物であって、様々な目的を達するための恐るべき手段ともなるのである。

しばしば、創られた伝統、イデオロギー、国家主義などの観念は否定的な評価を受けるが、これは、それらが頻繁に様々な抑圧的支配の正当化に利用されてきたからである。しかし、創られた伝統、イデオロギー、国家主義は、それ自体善でもなければ悪でもない。むしろ、それらの性格は利用の仕方の如何に

5 HOBBSAWM, *Nations and Nationalism since 1780* (イタリア版 *Nazioni e nazionalismi dal 1780. Programma, mito, realtà*, Einaudi, Torino 1991, 14-15頁) ; Miroslav HROCH, *Social precondition of national revival in Europe*, Cambridge 1985.

関わっている。周知のように、こうした人為的操作やイデオロギーは、政治的、経済的、社会的に搾取されていた集団を解放する働きを歴史上果たしてきた。のみならず、それらは社会的、政治的、経済的、文化的、かつまた個人的な存在にとってなくてはならない拠り所を我々各人に与えてくれるのである。アイデンティティのイデオロギーは、つまるところ、実現すべき政治的プロジェクトを前面に据えているのである。

1991年にイタリアではロンバルディア同盟が形成され、当時の政権、与党の一角をなすに至った。この同盟はイタリアで最も人口密度が高く、かつ生産性の優れた北部を基盤にし、そこで大きな支持を得た。その活動は合法性すれすれのところまで達したのである。1995年には北部国会創設を宣言し、納税義務拒否運動も何度か繰り返してきた。この運動の集会は、アルプス山脈からポー河流域一帯に広がる、彼らが称するところのパダーニアを賞用するシンボルを振りかざし、村祭りの様な様相を呈した。しかし、彼らの分離主義は政府与党に参加するために妥協を余儀なくされ、税制をはじめとする一連の政治的自立性を要求するに留まったのである。

1999年から2006年までイタリアの大統領だったチャンピは、イタリアの国家機構の目付け役としてあらゆる機会を捉えて、イタリア国民の統一性、国旗、国歌への尊敬を呼びかけた。イタリア国家が統一（明治維新の7年前）されてから1世紀半以上経ったが、その当時の名言に曰く「イタリアは成った。これからイタリア人を造らなければならない」。北部分離主義者たちは、イタリア国民としてのアイデンティティを拒否し、1世紀半も前から懸案になっている問題を蒸し返すのに情熱を燃やしている。すなわち、南北の経済格差、マフィアやカモッラのような犯罪集団の温床となっている南部の貧困という大問題である。

分離主義運動のカリスマ的リーダーは、アイデンティティのイデオロギーを形成しようと躍起になっているが、そこには歴史的背景も与って力がある。統一後のイタリアにおいては、政治的、経済的、社会的、地域的分裂と抗争が続いたのである。イタリア共和国のアイデンティティはファシズムの灰から生まれ、レジスタンス運動の理想を引き継ぐ政治的一面に依存する傾向がある。「イタリア」のアイデンティティは歴史が浅く、イタリア人同士の戦いで勝利

を得た理想に基盤を置いているのである。筆者自身のイタリア人としての自己意識も、たかだかこの60年間の歴史に関わっているに過ぎない。

この中途半端な勝利、勝者と敗者との亀裂は昔から解決を見ていない分裂に上乗せされ、ここにイタリアの国家的アイデンティティの脆弱さが露呈している。北部分裂主義運動はこの脆弱さに基盤を置いており、大統領のイタリア国家称揚の言葉にもこの弱さが見え隠れしている。事実、大統領の発言の意図は納得できるものであるが、それがアイデンティティのイデオロギーの一部であることは否めない。

沖縄のアイデンティティについてはどうであろう。この1世紀半の間に沖縄とその住民が経験した度重なる亀裂は一体何をもたらしたのであろうか。伝統的、文化的、歴史的財産のどれほどが、強制された日本化全体主義的国家主義、戦争体験、アメリカによる占領、経済的搾取、極端な軍事化、環境破壊といった事態を乗り越えて生き延びたのであろうか。

沖縄の「アイデンティティ」を守るために一体いくつの「イデオロギー」が要請されたであろうか。そして、それらのイデオロギーによる度重なる操作が「沖縄のアイデンティティ」を作り出す役割をどれだけ果たしたか。これらの問いは、当面の問題を解決するよりもその複雑さを浮上させるものであろう。ここで、アイデンティティという述語の定義に立ち戻る必要がある。

5) アイデンティティの認識

アイデンティティという述語はラテン語の“*identitas-identitatis*”に由来する。これは、また「同じ」という意味の“*idem*”に語源を持つ。したがって、この言葉は、違う人間同士が共通に持っており、彼らを他の人間に結び付け、一つの集団の一部として自己を認識させる基本的かつ本質的な特徴を指し示す。アイデンティティが時間軸において生起する構造の変化に応じて多面性を持つことはすでに言及した。ここでは、一定時間内において可能な限り安定した構造のアイデンティティを取り上げよう。この場合も、アイデンティティの価値は単独ではない。実際、一定数の人間が共通に持つ本質的な特徴は、外部的な価値も持っている。こういった特徴は外部からも認識されるものであって、

一定数の人間を一つのまとまった集団として特出する役割を果たす。アイデンティティのこの二つの様相（内部的認識と外部からの認定）は、どういう相互作用を持っているのであろうか。

おそらく、有益なのは明治時代から日本が沖縄に強制した同化政策を検討することであろう。周知のように、この政策は文明、進化、近代化の「進んだ」モデルを強要し、沖縄の「後進性」と住民の「ネガティブな」特性を強調するものであった。同化の政策とイデオロギーの中核には沖縄人民に対する「人種差別的」態度があった。日本人が沖縄人より優れているというだけではなく、沖縄人に道徳的、知的、性格的な分野にまで及ぶ一定の特性をア・プリオリに付与したのである。

すでに何回も指摘されたことであるが、中央から帝国の周縁地域に及ぼされた画一的ヴィジョンは、複雑な地獄的状况を全く考慮に入れていなかった。ジョージ・カーがすでに半世紀近くも前にこう書いている「乗り込んできた日本人たちは那覇、首里、宮古、八重山、久米、慶良間の住民たちをひとしなみに扱った。『植民地の処理』においては、彼らは皆『沖縄人』であった」。⁶

当然のことながら、誰もが同じように自分自身を沖縄人と感じていたわけではあるまい。しかし、「沖縄のアイデンティティ」を共有することは、本土からの同化政策、経済的搾取、差別的態度から身を守るための一つの手段でもあった。1909年6月13日付けの琉球新報に伊波普猷は、沖縄の個性を無視する国家主義への痛烈な批判を寄せ、若者に抵抗を促している。「我々沖縄青年は、臆することなく、各方面に向かって其の天性の個性を発揮すべきである」。⁷

那覇の素封家に生まれた偉大な知識人伊波が、自分を八重山の若い農民よりも日本の知識人に近い者として、自らのアイデンティティを認識していたかどうかの確証はない。これは同時代の人間にとっても難しい問題であったろう。つまるところ、さして重要な問題でもない。肝心なのは、彼の知識人としての活動の政治的側面である。

琉球処分以後の沖縄における政治的、経済的、社会的、文化的新状況への対

6 George H. KERR, *Okinawa. The History of an Island People*, Charles E. Tuttle (revised edition), 2000, 394頁.

7 沖縄県歴史教育者協議会編「沖縄と天皇」、あけぼの出版、那覇 1987、90-92頁.

応は、個人的あるいは部分的な次元で解決できる問題ではないということを伊波が察知していたのはほぼ確実であろう。沖縄の伝統的な（尚秦王をはじめ）上層階級という出自だけでは、明治国家が沖縄に課した植民地の処理を免れることはできなかった。伊波が沖縄人の「個性」を外部の世界から沖縄を区別する要素として主張したのは沖縄のアイデンティティへの貢献であろう。外部からの攻撃から共同一致して身を守るための手段として、あらゆるすべての沖縄人を包括するものが、このアイデンティティであった。この意味において沖縄内部に存在していた、様々な特殊性は理論的に無に帰され、沖縄のアイデンティティという観念が生み出されたのである。この観念は沖縄とその住民全体に何らかの利益をもたらすのにある程度有効であった。

伊波の知識人としての活動にこうした政治的側面があり、彼が主張した「沖縄のアイデンティティ」は様々な特殊性を忠実に反映したものではなかったことは事実であるにしても、彼が一個の「アイデンティティのイデオログ」であったことは確かであろう。私見ではこれが、「沖縄学の父」の政治的見解、政治的現実認識、真性の知識人としての視野の広さを示すものである。

伊波の人格と政治的見解は当時、他の知識人の場合と同じく、内部的には自己認識のパターンであり、また外部からのア・プリオリ的な特徴付けのシステムでもある沖縄のアイデンティティにおける二つの様相を考慮して、初めて明確になるものと思われる。しかし、この両面的なパースペクティブは、「沖縄のアイデンティティ」という命題に立ち向かうのに常に有効性を持つものであるかどうかは疑問である。特に、アメリカによる占領に先立つ時期については、さらに疑問が持たれる。「日本のなかの沖縄・沖縄のなかの日本」の観点に代わる視座は可能であろうか⁸。中央政府が歴史的に沖縄に投射してきた画一的見解と沖縄側からの意見として画一的かつ一貫した反応との間に立ち往生する危険を冒さずに「沖縄の主体」について語ることは常に妥当であろうか。そして、「沖縄の主体」というものをどう解釈したら良いのであろうか。

8 我部政男「日本のなかの沖縄・沖縄のなかの日本」、『琉球列島・社会的文化的ネットワークの研究』、法政大学沖縄文化研究所、ネットワークの研究・調査プロジェクト編、2003、5-13頁。

6) アイデンティティのブラックホール

最近、グレゴリー・スミッツを含む何人かの学者が、一種の悲劇的英雄とされた謝花昇（1865－1908）の貢献を再考した⁹。筆者自身も知事、奈良原繁に対抗して農民の権利を守るための政治的戦いを主導した沖縄人として、多かれ少なかれ理想化されたイメージを抱いたことがある¹⁰。しかし、スミッツの著作を読むと、謝花の人生はさほど単純なものではなく、同時代の他の知識人と比べても、非常に複雑な様相を呈していたことが分かる。

まず第一に、彼の存在とアイデンティティは、「真性の日本人」を認定する基準となる支配的モデルと、彼の「アイデンティティ」以前の沖縄人としての「条件」との間の矛盾に強く規定されていたようである。同時代の多くの有名な上流階級の人とも、彼よりも社会的、経済的貧困に諦めて身を委ねていたであろう農民たちとも、謝花を区別する第一の要素は、農民という出自から身を起こそうとする「願望」であった。しかし、それだけではない。スミッツは言う、「謝花の著作と行動をより注意深く検討すると、農民反抗勢力を腐敗した、無知な集団と考えていたことが分かる。」謝花は、昔からの地域旧上層階級と沖縄県外から移住してきた人々に土地を譲渡することに好意的であった¹¹。そうは言っても、謝花の立場を内部的な自己認識のパターンと外部からのア・プリオリ的な特徴付けのシステムとの関わりにおいて検討するだけで良いのであろうか。換言すれば、「沖縄の主体」の内部に、それはどういう位置を占めるのであろうか。

謝花が自分のかなり短くて、困難な生涯中どのように自己意識を感じたか、どのようなアイデンティティの形に向けて居場所を求めているのか、想像しようと試みた。これについて、スミッツは納得できるように思われる解釈の鍵を提供している。事実、スミッツは言っている、「謝花が結局気が狂ったのは驚く

9 Gregory SMITS, "Jahana Noboru, Okinawan Activist and Scholar", in Anne Walthall (ed), *The Human Tradition in Modern Japan*, 2002, 99-113頁; 伊佐眞一編・解説『謝花昇集』、みすず書房 東京 1998.

10 大里康永『沖縄の自由民権運動—先駆者謝花昇の思想と行動』、太平出版、東京 1969参照.

11 SMITS, "Jahana Noboru...", 105頁.

べきことではない。社会的仕組みの中で自らの『位置』を失った人にとって、社会の中で心地よく住める避難所はなかった。結局、彼は完全に疎外されてしまった¹²。これは、他の個人と共有するのに適した空間を見付けるのが不可能であり、無能であったため、日本においてばかりでなく、沖縄においても彼自身の「沖縄人」としてのアイデンティティに疑問がないように思われるにせよ、謝花は共同体の一員としての自覚を失ったか拒否したことを意味する。謝花が辿りついた唯一の解決は疎外であった。つまり、集団との絆を保ち、自分の社会的、経済的アイデンティティを維持するためには無能で、不可能であったため、共存から感情的、社会的に隔たってしまったのである。他方、回復できなかった精神の危機が1901年に沖縄における一連の政治的、財政的破綻のせいで、それまでのよりもずっと劣る仕事に就くために赴いた神戸駅で彼を捕らえた。¹³

この面では、謝花の件は「沖縄と本土との間の入り組んだ関係についてのコメント」以上のものを表しているように思われる¹⁴。事実、謝花の個人的な変遷は、伊波の件のような日本・沖縄、沖縄・日本という「二面的な」観点から考察できる他の例よりも、はるかに複雑であるように思われる。多くの要素が謝花と伊波を区別する。出自ばかりでなく、特に1879年以降沖縄で起こった問題についての異なった受容の仕方、つまりそれらの問題に対する異なった態度である。確かに、少なくとも沖縄の社会組織の内部で中・上流の位置を占めていた当時の多くの知識人と違って、謝花は沖縄処分以後起こった問題ばかりでなく、中・高階層と農民層との間の伝統的な対立にも直面した。自分の慎ましい出自と強い野心との間の矛盾よりも彼を袋小路に追い詰めたのは、この矛盾は個人的な次元に辿るまでの部分的な範疇内で解決できるものと彼が信じていたことである。

彼は、「沖縄と本土との間の入り組んだ関係」のみならず、沖縄内部の一種の「階級闘争」（あるいは利害闘争）に巻き込まれて、その前衛として孤軍奮闘していた感がある。かかる孤立状況は、彼が慎ましい出自からの上昇を果たしたためばかりではなく、その野心には所属する環境よりも（農民であれ、上流階

12 SMITS, "Jahana Noboru...", 110頁.

13 SMITS, "Jahana Noboru...", 109頁; 大里康永『沖縄の自由民権運動』250-51頁.

14 SMITS, "Jahana Noboru...", 99頁.

級であれ、また「沖縄人」全体であれ）自分自身の利益を優先させるふしがあったことにも起因する。“Self-made man”の生ける見本となれたことで、彼は日本人に対して、また沖縄人に対して二重の戦いが挑めると思うに至った。しかし、「味方」を見付けることができなかったために、彼は社会的に孤立し、情緒的にも心理的にも孤独を味わうようになった。結局、戦略を誤った戦いの中で彼の共同体アイデンティティばかりでなく、個人としてのアイデンティティまで閉塞させられることとなったのである。謝花は時代の現実の犠牲者であるばかりでなく彼自身の偏った現実認識の犠牲者でもあったのだ。この点は謝花を、伊波や他の同時代の知識人と区別する重要なポイントと思われる。この点においても謝花の場合は社会的、政治的、経済的、文化的、道徳的空間を他者と共有できなければ、どういう危険が待ち構えているかを明らかにしてくれる。

謝花の沖縄人としての条件と農民としての出自の条件と、どちらが彼にとって重かったのであろうか。彼の“self-made man”願望は上流階級の同胞達と同じぐらい彼にとっては超えられない障害だったはずである。他方、二次元的な鏡の悪戯（内部的な自己認識と外部からのア・プリオリな特定）の外に「社会的避難所」を見出すことは伝統的な社会体系の外部に、それを見付けることと同じように誰にとっても困難な事業であろう。彼らの社会、経済的な条件によって身動きならず規定されてきた沖縄人に、日本の支配的イデオロギーは一定の空間に対応した明確なアイデンティティを付与したのである。自分自身の条件とアイデンティティを放棄して規定された場所から脱出し、秩序を転覆しようとするなら、社会的、経済的、文化的、ひいては個人的な自己同一性を保つのは不可能である。おそらく、規定された場所の外に待ち構えているのはブラックホールのみであり、謝花もそこに堕ち込んでしまったのである。

7) アイデンティティの記憶

最終的に、沖縄のアイデンティティについて何が言えるだろうか。日本近代国家に組み込まれて以来、それは度重なる挑戦、分裂、衝撃にさらされてきた。様々な利害や権力を正当化するために、時と場合に応じて作られてきたアイデンティティのイデオロギーの渦に巻き込まれてきたのである。だとすれば、今

沖縄のアイデンティティの何が残っているのでしょうか。

沖縄のアイデンティティが蒙ってきた、様々な根底からの歪みは、それが引き起こされた「短い時間」の範疇内に収まる問題ではない。ブローデルの言うように、集団の歴史現象における真の性質に最も良く焦点を当てるのは「長い持続」の時間であるが、さらに沖縄のアイデンティティの定義自体が「長い持続」の時間を要請する記憶の産物であり、今でもそうなのである。

共同体のアイデンティティは、結局、記憶の産物である。この記憶は選択的であり、偏ってもいるが同時に動的でもある。過去という巨大なスーパーマーケットの中を旅するようなものである。あちらこちら歩いては現在に持ち込むべきものを漁る。この選択は決定的ではなく、絶え間ない往復運動を繰り返す。この運動は共同体のアイデンティティに一貫性と、正当性と、活力を与え、現在の要請、計画、構想、利害に対応するため、繰り返し行われる。つまり、共同体のアイデンティティの記憶は実現すべきプロジェクトを前面に据えており、過去のどの部分を現在に持ち込むかは、そのプロジェクトの変化に応じて変わってくる。この観点から見ると、肝心なのは沖縄の共同アイデンティティのどこまでが真性でどこまでが作られたものであるかではなく、むしろ共同の記憶が共生の根本的な理由付けをどこまで達成できるかなのである。

フランス人のモリス・アルヴァックス（1877-1945）は社会的現象としての記憶を研究し、記憶の社会史の基礎を築いた人物である。ナチのブケンヴァルド強制収容所で亡くなる数年前に彼は、過去というものは保存するのではなく再構築するものであり、共同記憶は過去そのものの復活や再生ではなく、本質的に現在のための過去の再構築であると述べた。¹⁵

1974年、豊平良顕は朝日新聞紙上で、統合以来、沖縄の観光地化を目標に大量に投入された本土企業の資本が、沖縄の経済、生活、環境に及ぼした甚大な被害を告発した。豊平は本土の経済的介入とその副作用から沖縄を守るための方策を探り、沖縄の歴史、民俗、文化、自然を含めたアイデンティティを保存し、民族意識を強化する「新自衛」という方針を示唆した。これは、豊平によれば、沖縄を経済的、政治的、文化的乱用から守る市民的、平和的力となるは

15 Maurice HALBWACHS, *La memoire collective*, 没後出版、1950（イタリア版 *La memoria collettiva*, Edizioni UNICOPLI, Milano 1996, 21頁）。

ずである¹⁶。豊平は沖縄人民全体を無差別に巻き込む攻撃からの共同防衛の手段として沖縄のアイデンティティを主張したという点で、伊波の方向を継承していると言える。さらに、伊波と同様に、沖縄のアイデンティティの支柱として、またその現在の共有財産として、過去の伝統に拠り所を求めている。豊平が潜在的に求めているのは、過去の一部が現在に移行され沖縄人に共有され、保存されることである。

共同体のアイデンティティの記憶において、過去を具体的、可視的、ひいては触知し得るものに変えるために、さらなる階梯がある。太田昌秀知事であったとき、沖縄戦後50年に当たって除幕された平和の礎などがその例である。そこに刻まれた23万名以上の氏名は戦役の記憶を触知し得るものにする役割を果たしている。しかし、勝者と敗者（見方によっては殺戮者と犠牲者）の氏名が無差別に並んでいる点が大きな論争的となり、県内外のみならず日本から海外に至るまで喧騒を引き起こした。¹⁷

沖縄のアイデンティティの記憶にとって重要なのは、この礎が個人的な記憶としては薄れつつある過去の経験を具体的な形にして現在に示しているということである。他方、「歴史的悲劇もアイデンティティ形成の機会である」ということも事実である¹⁸。しかし、同時に、平和の礎をめぐる論争は興味深い示唆を与えてくれる。例えば、現在におけるアイデンティティ規定のために記憶が呼び起こす過去が、権力の絡み合いに関わりを持ち、様々な要求と利害の弁証法を表現する故に討論の対象になるという事実である。中央によって、作られ、語られ、称揚されたいわゆる正史に迎合するような事業が多くの人間の（主に沖縄人）批判の対象となったのは偶然ではない。この正史は日本の戦争責任を頑強に認めようとせず、それを日本人の共通記憶から排除するように働く。このような観点に対立する、戦争経験のまた別の記憶がある。それは、中

16 TOYOHIRA Yoshiaki 「沖縄の喪失の危機と自衛の思想」、『朝日新聞』夕刊、1974年5月7日（英語版 in *The Japan Interpreter*, vol. IX, n. 3, Winter 1975, 353-357頁）。

17 Gerald FIGAL, "Historical Sense and Commemorative Sensibility at Okinawa's Cornerstone of Peace", in *positions: east asia cultures critiques*, vol. 5, n. 3 (Winter 1997), 745-778頁。

18 Domenico LOSURDO, *Il revisionismo storico. Problemi e miti*, Laterza, Roma-Bari 1996, 253頁。

央が保持しようとする記憶に異議を唱え、中央と辺境の相互闘争を反映している。この意味において平和の礎は、平和ではなく、沖縄人が戦争経験から引き出し、未来に保存しようとする平和の観念を表していると言えよう。

長い持続の観点から、沖縄のアイデンティティにおける何らかの強固で恒久的な要素を跡付けることができるであろうか。「構造」の絶え間ない、根本的な変化に伴う流動性にもかかわらず生き残ったものが見つかるであろうか。おそらく、それは自らの特徴的な相貌を守り抜き、外部の利害から身を守るために、過去の伝統を振り返ろうとする執拗な意志の中に跡付けることができるであろう。生き残るものは、短い時間の分裂に抵抗して、沖縄人の共有体験を位置付ける「長い持続」の時間を絶え間なく探し続ける記憶であると思われる。

提起した問題の大きさに比して筆者が出した回答は、あまりに貧しいものと思われるかもしれない。他方、研究活動というのは、一つあればさらにまた新しい容器が出て来る入れ籠細工のようなもので、沖縄のアイデンティティを探すことも、果てしなく入り組んだ作業である。それは、この1世紀半の複雑きわまる沖縄の歴史の産物と言えよう。おそらく、正にこの複雑な経過のゆえに、我部政男がいうように「近代日本の沖縄意識を学問的に解明しようとする行為は、古くて新しい課題のようである」¹⁹。事実、アイデンティティの問題は、どこにおいても古くて新しい問題である。*Learner's Dictionary* (The Cobuild Series) によるとアイデンティティとは “Your identity is who you are”。おそらく、短くて一見平凡なこの定義こそが、アイデンティティの問題がどこにおいても、常に古くて新しい問題である理由を示唆してくれている。

19 我部政男「日本のなかの沖縄・沖縄のなかの日本」、5頁。

Light and shadow in the Ryūkyūan-Okinawan identity

Rosa CAROLI

This paper begins by pointing out the complexity of dealing with the issue of identity, especially in the Ryukyuan-Okinawan context, which is characterized by dramatic historical changes. Actually, after the Ryūkyū kingdom was formally annexed to Japan by the Meiji government in 1879, the inhabitants of this region, situated on the periphery of a rapidly modernizing nation state, were subjected to the assimilation policies and discriminatory attitudes of the Japanese central government. Great sacrifices were demanded throughout the Okinawan islands during World War II, and in the succeeding years the Okinawan people suffered the indignity of occupation by American forces.

The question of how to establish and maintain an independent identity albeit these dramatic changes is one that they struggled with throughout this period. This struggle is examined through the activities of the “father of Okinawan studies,” IHA Fuyū (1876–1947), and his contemporaries (such as JAHANA Noboru, 1865–1908); the activity of the reversion movement (Fukkikyō) during the American administration; and the significance of the Cornerstone of Peace (*heiwa no ishiji*) in the Mabuni Peace Memorial Park, which was erected to remember those who were killed in the wartime period.

The final part analyses the relationship between memory and identity, where the identity of a community is considered as a result of memory that requires a substantial temporal duration to function. This memory is selective. It is biased, yet at the same time dynamic. In this regard, the French scholar Maurice HALBWACHS (1877–1945), who is considered the ‘father’ of the social history of memory, wrote a few years before his death in Buchenwald concentration camp that the past is not conserved but is reconstructed, and that col-

lective memory is not a simple resurrection or a revival of the past, but is essentially a reconstruction of the past in the function of the present. This means that, behind public memory and collective identity, there is always a project to accomplish, and that the selection of *which* past is to be brought into the present changes with the change of this project. What is crucial when considering the Ryūkyūan-Okinawan identity is how well the communal memory functions in establishing basic grounds for continued communal relations. The academic elucidation of the Ryūkyūan-Okinawan identity, however, remains a problem both old and new.